

永久に疑はざるものなり、あゝ一人の左袒者あ  
らば腑毫の幸甚何物か之に加へむ。

◎修 養

文科四年 櫻 井 藤 枝

銀燭煌々として緑酒漉の如き中に坐し悠然と  
して浩歌妙舞する者その歩武は蹠跚たりその意  
氣は揚々たり、悠忽背後千仞の斷崖峨々として  
怪雲その半を蔽ひ猛獸魔神の叫び山彦と相應へ  
脚底萬里の蒼波轟然白山を崩し龍頭岩に狂ひ飛  
沫衣を濕す此の際この機彼等は愕然として心戦  
き氣息奄々將に絶えなんとすこゝに於て心意轉  
た昏迷懊惱して絶叫せんとして始めて黒恬郷裡  
の一夢たるを知る嗟乎滔々たる天下それ夢中の  
人にあらざるもの果して幾許ぞ。

思ふに一の大國家には必ず一の大精神あり而  
してその盛衰消長は直ちに國家の治亂興亡を伴  
ふものにして恰も國家は人類の體軀の如く精神  
はなほその軀髓の如し。  
靈活せる一大精神ありてその美その妙の個人

時北條時政あり豊臣氏に小西石田大野ありしが  
如き思ふに是れ必ずしも彼等愚者ならんや彼等  
悉く痴漢ならんや只彼等は理想低く私利に耽り  
私慾を貪らんとし精神の根柢を捨て術數の末に  
走りたるによるのみ嗚呼これ抑々既往の事蹟と  
して輕忽に看過すべけんや。

維新以來泰西の文物轟然として入り來るや物  
質的文明は頓にその面目を改めぬ而して我が精  
神の眞粹は稍國民の腦裡をはなれんとし輕薄  
風をなし朝野の間にありて評判よき士は謹嚴至  
誠の精神的の人にあらずして融通の才子たるな  
り正直を稱て野暮とし篤實を嘲りて變通をしら  
ずといふ今や黃鐘棄擲せられて瓦釜雷鳴すあゝ  
國家精神の衰へたる一に何ぞこゝに至るや。  
人やゝもすればいふ天下のために一身を犠牲  
に供すと又曰く國家のために身命を擲つこと弊  
履よりも易しとその意氣亦盛なりといふべし。  
しかも是れかの夢中浩歌妙舞する者と孰れぞ忽  
ちにして泰山裂け滄海溢れ迅雷風烈天地を震撼  
して至るの刹那顔色菜よりも青からざる者幾人

の上に表はれ來るもの或は正義至誠の念となり  
或は尊敬扶持の道義となり以て能く風教をして  
醇ならしめ以て能く治化をして隆ならしむべし  
我が國は天祖國を肇め給ひ天壤無窮の神勅と  
共に金甌無缺千古萬古亦動くことなし故に國家  
の大精神は最も強固にして磅礴として大八洲に  
充溢せり日本魂と稱するもの即ち是れなり。

吾人は史を繙く毎に我が國の大精神たる日本  
魂の一部が武士道として武門の間に現はれ來り  
たるを見て所謂古道の俤をこゝに偲ぶと共に更  
に日本魂全部の發揚を望んで止まざるなり。

古來英武一世の風雲に鞭ちて蹶起し倒山翻海  
の活劇を演じ雄を稱し弱を成すものを觀るに必  
ずやその幕僚に高大至誠超然として傑出せる精  
神的の偉人あるを要す源賴朝に和田義盛あり豊  
臣氏に加藤清正片桐且元あり徳川氏に井伊直政  
大久保忠隣酒井忠勝あり是に反して國を亡ばし  
社稷を顛覆せるものを觀るに多くは是れ偉人を  
遠けて小人を近づけ徳義を輕んじ利口辯佞の徒  
を重んぜざるもの殆ど稀なりかの源氏に源原景

かある遮莫東洋の潮流瀾急激にして殺氣まさに  
鬱勃たり軍艦造らざる可らず兵備擴張せざる可  
らずしかも最も急ぐべきものは國家大精神の  
修養にあらずして何ぞ夢見る者よ起てよ醉へる  
者よさめよ封豕長蛇は白き牙を磨き紅の舌を吐  
きて二六時中汝の前後左右に朶願しつゝあるを  
知らずや。

◎山の火

文科四年 長谷川 すが

火事よ火事よといひながら、たれも手のつけ  
やうのない東の山は、夜になつて、ます／＼熾  
に燃え出した。

「山やける獅子をざる猿が豆食てのどきつき  
つ」とうたつてゐた里の子は、はや夢路に入つ  
た火のことは分らない、連日のてりで、乾き  
つた、多くの木がすれあつて、火をおこしたの  
かも知れないと、或物知りはいつた。  
こゝは、鶴の首とよんで、御國自慢の一にか  
ぞへられ、常緑木のしげりにしげつた中央には

苔むした安山岩が、岑をさして屏風のやうに走つてゐる。山すそには、清い水が、底のいさごも敷へられるほど澄んで流れてゐる。流れを溯るさびあゆの青い脊も涼しさうである。太陽はこの山から出る。いつの朝も、村人は合掌禮拜してゐる。私はこの山に冬の日の照るのをよろこんだ、峰の上に、むく／＼といろんな形をなしてゐる夏の雲を、私は雄々しいと見た、にはか雨のあと、七彩の虹霓が御山に橋をかけたのを私は天への道かとおもつた、秋のもみぢの美しさはないけれど、裾をまとふ鳶の紅葉は私に悲しい思をさせた、春の山はなつかしくいきいきしてゐた。

その山が今は炎々ともえてゐる、火は北と南とに分れ屏風岩をとりまいて、燃えてゆく。重いむせるやうな空に、赤い焔の舌は黒いけむりと共に、のぼつてゆく。おそろしさの伴つた壯觀を私は知らず、味つてゐた。燃える／＼、木のさける音、倒れる音、石のくづれる音、人のさけび聲、赤くたれた石が腰の尻を引いて

ころんでくる。谷間に潜んでゐた火の手は、見るあがつて天をこがせど一時におそつた。私は目をつぶつた、遠くで人々を指揮してゐる父の聲が聞える、かなはぬまでも、出来るだけは防がうとするのだ。私は、人々の上に向けがないやうにと祈つた。

アーチストには、巨人石なる友があつた、ダツフ子は、ペニーオスなる川を父とよんだ。私は、この山とこの川とをなつかしむ、呱呱の聲をあげてから二十年、この美しい山と水とにつゝまれた村に育つて、私は大自然を友とした、父とした、母とした、朝夕ながめて、おもはず涙をこぼしたり、不言に迫る大自然の力にはげまされて、私はわが道にと進んでゐる、その山が今は熾にもえてゐる、きずつけらるゝ友を見ながら私は何とも出来ぬのをくやんだ。詩のためには、ローマをやいた、私の友は、誰のため何のためにやけてゐる？許せ！汝の友は女であつた、かよわい女であつた、かの女は、自若として、やかれる友を、をの／＼ながら、而も勇

ましいと見てゐる。水にうつゝた火のかけを、おはれと見てゐる。水にうつつた火のかけを、おはれと見てゐる、あゝ、すゝてをゆるせわが友。

この夜こゝに居た人で、一寸でも、うしろをふりかへつた人はなからう、私は非常なコントラストに驚かされた、私たちは、すさまじい色や音にばかり心をとられてゐた。見よ後方の静寂を！四聖の一人釋迦は、しづかにねむつてゐるではないか！といつても遠い人には分るまいわが西山は寢釋迦といつて、丁度、形がおしやか様が涅槃に入られる姿になつてゐる、楫保の川に舟を浮べる人は、この御姿に、まづ渴仰の涙をそぐ、涼風そよぐある夕、私は川岸をあるいて偉大な姿にわれを忘れて、ふしをがんだともあつた。笑はれるかも知れないけれど、私には真面目であつた。私は一切を忘れて、尊い心になり、人格の力の大きなを知つたのであつた。

ペールな月は、永久の神秘をもだしつゝ、東の物音を、そがひにしてねむつてゐる偉人をし

づかに照してゐる。光はやがて流れて、裾野の田の稲葉の露を玉と輝かせてゐる。星は涼しうに、またゝいてゐる。初秋の虫は、コーラスを亂されもせず、やさしくうたつてゐる。風はそよ／＼と袂をふく。このコントラスト！とのつた、しづかな、やさしい、美にうたれて私は深い／＼瞑想におちた。

「——昨夜の山の火御あたりにも御覽になり候ことゝ存じ候小生例の釣魚のため上流にまりめづらしくいたましく見物いたし候——」めづらしく、いたましく！、何と私はいへない感じがした、これは尾上先生の御たよりである。山はやけた。しかし、私は思つたほど風致がそがれてゐないのをよろこんでゐる。わが故里が美しい所、清い所、なつかしい所、ゆかしい所と、先生にはめられたことを、こゝに又私のほこりとして記しておく。(明治四十四年九月初旬誌)